

# 小田原北条氏における伊豆・葦山

伊豆の国市企画課歴史・文化拠点施設整備室

学芸員 池谷初恵

## はじめに

葦山城跡は、小田原北条氏の祖、伊勢宗瑞が伊豆の拠点として構え、戦国時代約100年にわたる構造変化がわかる遺跡である。また、周辺には豊臣秀吉軍が小田原攻めの際に築いた付城跡群が良好な状態で残っている。葦山城は、伊豆の戦国時代の「はじまりと終わりを語る城」である。

これまで34地点で発掘調査が行われ、屋敷跡・堀・道路状遺構などが確認されている。また、平成23年度から令和5年度まで13年にわたり、伊豆の国市史跡等整備調査委員会葦山城跡整備部会において調査・研究を行っており、その成果は『葦山城跡及び付城跡群総合調査報告書』にまとめられた（伊豆の国市教育委員会2024）。本報告は、その成果に基づいている。

## 1. 葦山城跡の立地・規模・構造（図1）

葦山城跡は、伊豆の国市の北部、葦山・葦山土手和田・葦山金谷・南條に所在する。多賀・宇佐美火山群の西側斜面に接する独立丘陵「天ヶ岳」と、そこから派生する尾根上に立地する。葦山城は中心となる本城の龍城山、その周辺の低地部、天ヶ岳の3地域に広がり、城域は南北1280m、東西920mに及ぶ。天ヶ岳の標高は128m、本城のある龍城山の標高は53mである。丘陵上の主な遺構としては、中心となる「本城」とそれを取り囲む「天ヶ岳遺構群」・「土手和田遺構

表1 葦山城略年表

年代		葦山城・北条氏に関するできごと	城主 郡代・城将	北条家 当主
和暦	西暦			
長祿2年	1458	足利政知、新たな鎌倉公方として京より下向、初め国清寺に入り、のち北条に堀越御所を構える。この頃、足利政知家臣、外山豊前守あるいは田中内膳が葦山城に居城したと伝わる。		
明応2年	1493	伊勢宗瑞、伊豆に侵攻し、堀越御所の足利茶々丸（政知の子）を攻める。葦山に本拠を定める。	伊勢宗瑞 （北条早雲）	伊勢宗瑞 （北条早雲）
明応7年	1498	伊勢宗瑞、この頃までに伊豆を平定		
明応9年	1500	この頃までに葦山城が整備されていた。伊勢宗瑞が葦山城内に熊野権現社を勧請したと伝わる。		
永正16年	1519	伊勢宗瑞、葦山城で死去		
大永3年	1523	氏綱、伊勢氏から北条氏に改姓		
天文6年	1537	天文14年まで、今川義元と対立・抗争。「河東一乱」が起こる。葦山城は今川氏・武田氏に対する拠点城郭として重要視される。	笠原氏 清水氏	氏綱
天文23年	1554	駿甲相三国同盟の成立		
永祿11年	1568	三国同盟の破綻		
永祿12年	1569	武田信玄、駿河東部・伊豆に侵攻し、葦山城で北条氏規らと合戦に及ぶ。		氏康
元亀元年	1570	武田信玄、再び伊豆に侵攻、葦山城下に迫る。		
元亀2年	1571	甲相同盟の成立	氏政	
天正7年	1579	天正10年まで、武田勝頼と駿河東部の支配権をめぐる抗争		
天正8年	1580	武田氏との駿河湾海戦。北条氏政、清水康英に葦山城を堅く守るよう命ずる。	北条氏規	氏直
天正13年	1585	天正18年まで葦山城の普請が盛んに行われる。		
天正17年	1589	豊臣秀吉、北条氏政・氏直に小田原攻めを布告		
天正18年	1590	北条氏政、北条氏規に葦山城守備を指示		
		北条氏政、北条氏規に葦山城番帳及び城普請について指示		
		3月29日豊臣方、葦山城攻め始まる。		
		6月7日家康、北条氏規に葦山城開城を勧める。 6月24日葦山城開城		
慶長6年	1601	8月内藤信成、葦山城主となる。 内藤信成、駿府へ転封（葦山城廃城）	内藤信成	

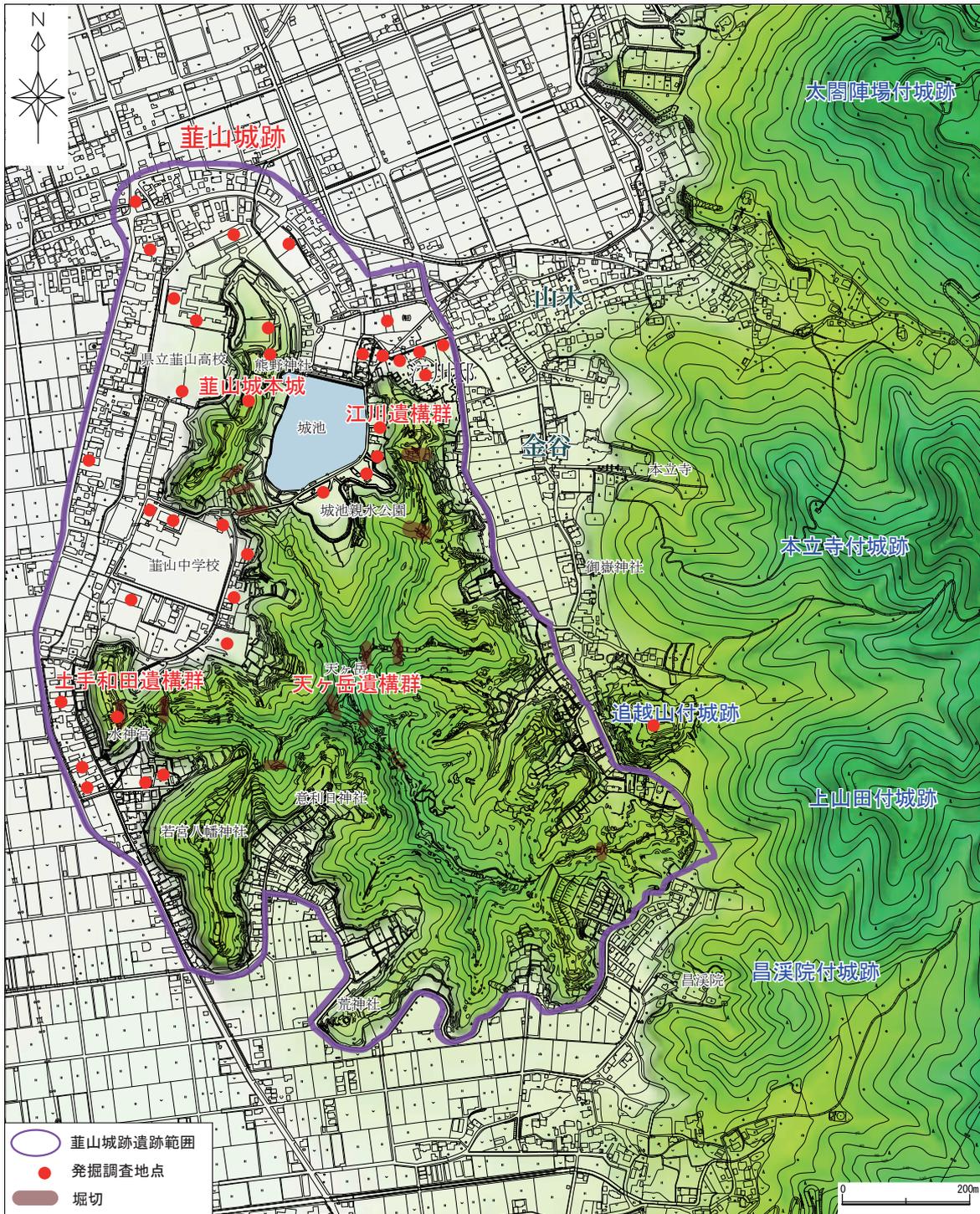


図1 葦山城跡及び付城跡群の位置・範囲・発掘調査地点

群」・「江川遺構群」の3つの遺構群で構成される。

## 2. 葦山城略史 (表1)

明応2年(1493)、伊勢宗瑞は、伊豆北条の堀越御所を攻め、伊豆国に進出した。数年かけて国内を平定した宗瑞は、葦山城を整備し本城と定めた。宗瑞の死後、2代目の氏綱は北条氏と改姓し、相模國小田原に本拠の城を移したため、葦山城は伊豆国を治める支城の扱いとなり、伊豆郡代清水氏・笠原氏が入った。



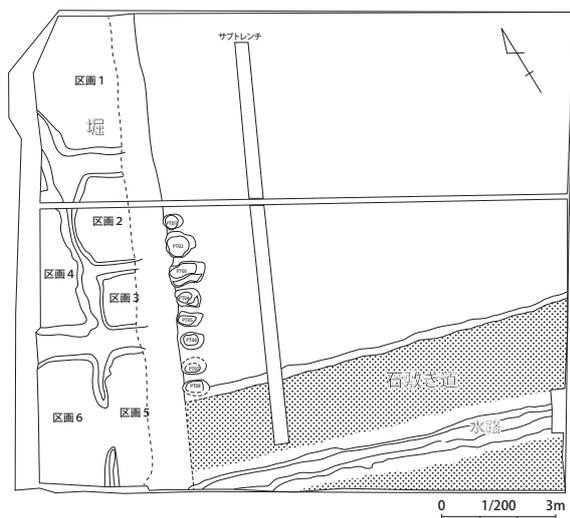


図3 芳池第5地点の発掘調査平面図



図4 芳池第5地点の全体写真

区画をもつ障子堀で、法面には「しがら（しがらみ）」が組まれていた。堀の位置・方向・構造などから、御座敷第1地点、第3地点で検出された堀に連続するものと想定できる。（図5-堀1）

御座敷第1地点・外池第1地点・盲女島第4地点では大規模な堀が確認された（図5-堀2・6）。外池第1地点・盲女島第4地点では、3段階の改築が行われていることも明らかになっている。丘陵部における発掘調査は少ないが、本城二ノ丸のトレンチ調査では、礎石列が検出され、規模は不明であるが、建物の存在が確認された。天ヶ岳では、土手和田遺構群において現状で確認されている堀の調査を行った。堀はL字状に配置され、岩盤を掘り残した区画を構築している。堀底までの深さは現地表面から2.5mであり、堅固な遺構であることが確認された。

#### 4. その他、葦山城を解明する史・資料

##### (1) 文献史料から見る葦山城の構造

小田原北条氏に関する文献史料は多く残されており、葦山城に関する史料も多い。しかし、城の構造がわかる史料は意外に少なく、永禄から天正期の武田氏と豊臣軍との攻防に関わる史料から、北条氏側の備えや敵方の布陣・戦況を知ることができる。

元亀元年～天正10年の武田氏との攻防では、「…葦山者于今外宿も堅固ニ相拘候、於要害者、何も相違有間敷候…」（北条氏政書状 元亀元年〔1570〕）、「…町庭口と申所、にら山之城より一里計外宿ニ候所ニ、…」（山角康定書状 元亀元年〔1570〕）とあり、葦山城は「外宿」と「要害」とが一体で構成されており、また、合戦が葦山城より一里ほど離れた場所にある「町庭口」・「外宿」で行われていたことがわかる。また、「…諸口共堅固之及防戦候、就中此方持口和田嶋、如何ニも堅固ニ候、心易可被存候」（北条氏規書状 元亀元年〔1570〕）には、北条氏規が「和田嶋口」に在陣していたが記されている。この「和田嶋口」は、土手和田遺構群に相当すると推測され、天ヶ岳の稜線に築かれた堀切などの遺構がこの頃にはすでに存在していたと想定される。また、「葦山要害之御用、大和竹貳拾本可致進上、…」（北条家朱印状写 天正3年〔1575〕）からは、普請のために竹を集め、また今後も御用のために竹を準備しておくことが命令されている。芳池第5地点の堀法面のしがらの一部は竹で組まれていた。

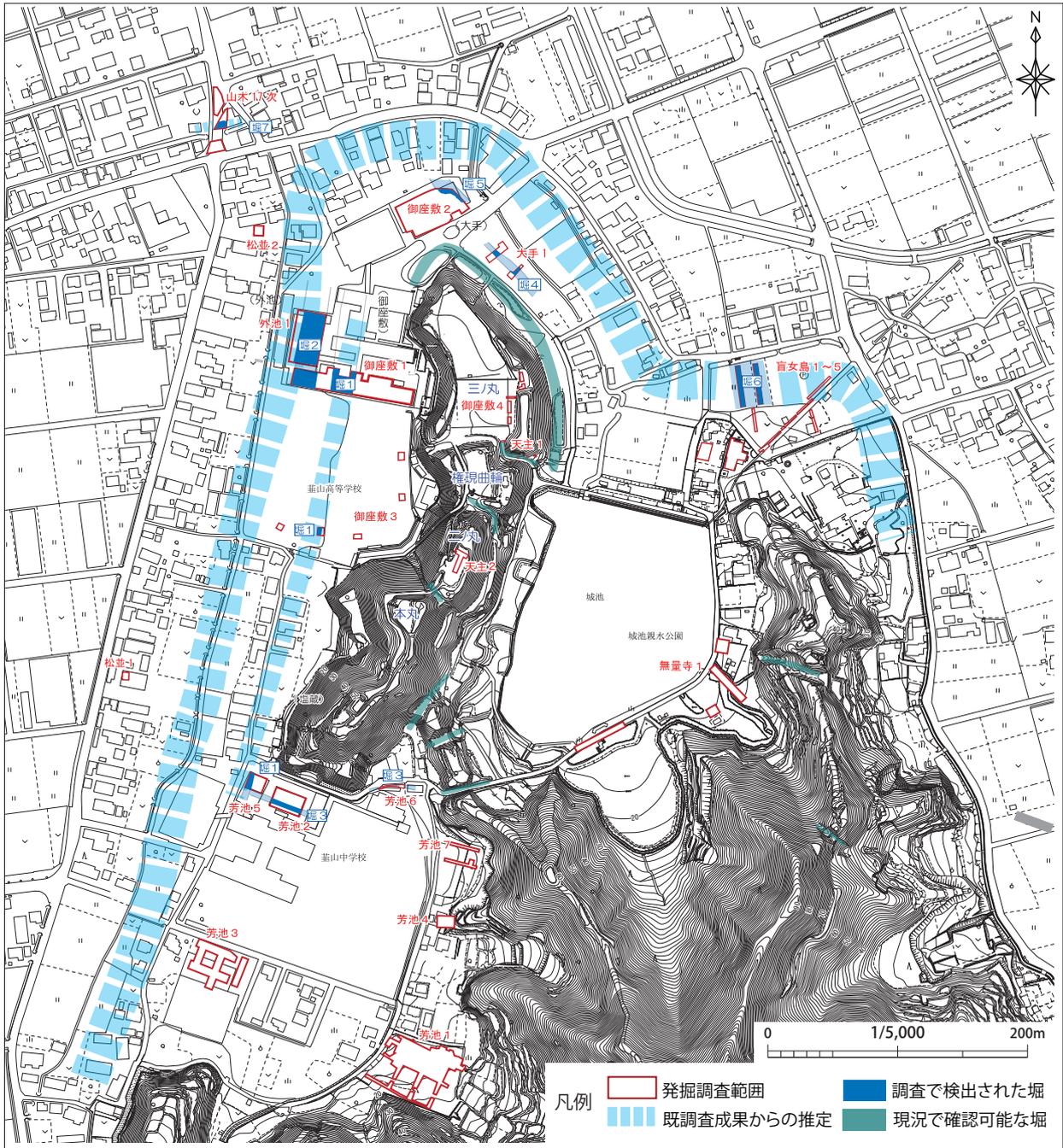


図5 葦山城跡で検出した堀の配置

天正18年の豊臣軍との攻防では、北条氏、豊臣軍双方の史料が残っている。氏政から氏規に宛て「…曲輪割之模様尤候、兼日者、大筋目迄候、絵図を一ツ被成…」(北条氏政書状天正18年〔1590])と、守備を嚴重にするよう指示し、また別の書状には、「…此度之矢普請者、御曲輪之内二候へ共、既大構出来よりして者、曲輪之内之者すましき与云儀有間敷候…」(北条氏政書状 天正18年〔1590])と「矢普請」や「大構」という防備の語が見える。

(2) 絵図・古写真から見る葦山城とその周辺

毛利家に残る絵図『小田原陣之時葦山城仕寄陣取図』は、豊臣側から見た天正18年の葦山城の姿と、豊臣軍の布陣が具体的にわかる良好な資料である(図6)。葦山城北側の直線表現は、

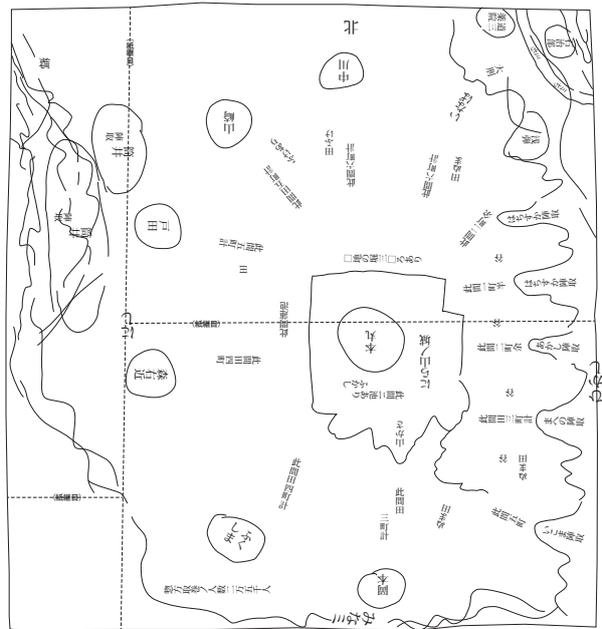
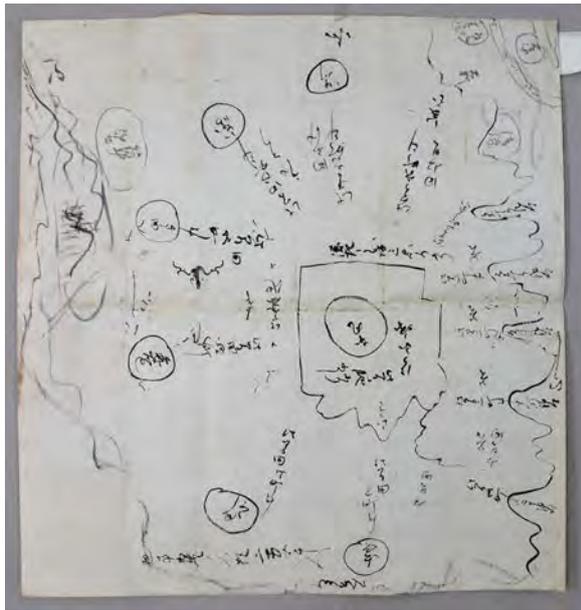


図6 『小田原陣之時葦山城仕寄陣取図』写真・トレース図(山口県文書館所蔵)

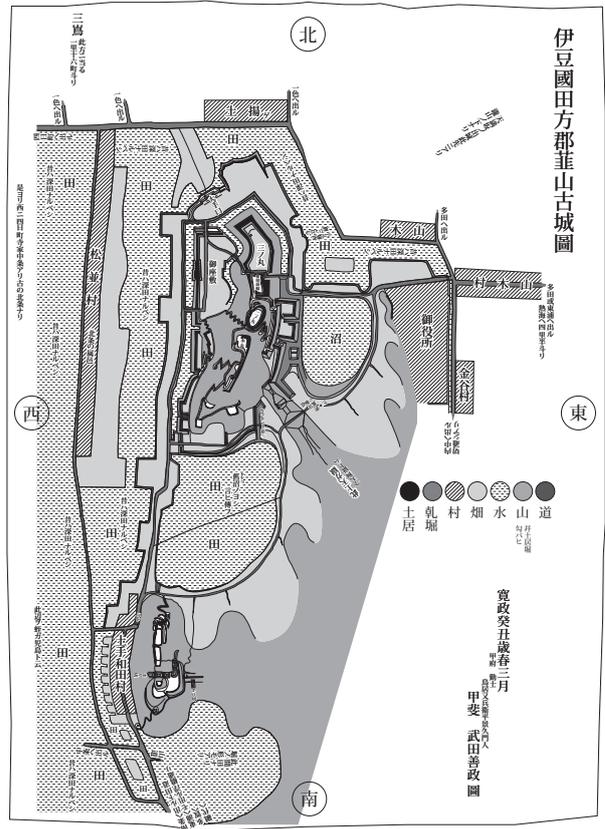


図7 『伊豆国田方郡葦山古城図』(公益財団法人江川文庫所蔵)

先の氏政書状にある「大構」と考えられる。南側の表現は天ヶ岳であろう。また、東側の山には付城群、西側の平地には陣が描かれ、それぞれ武将の名が記されている。

寛政5年(1793)製作の『伊豆国田方郡葦山古城図』は、廃城から約200年後の葦山城の現況を描いた絵図で、本城と土手和田遺構群の堀・土塁・道などを色分けで示している(図7)。また、本城には北から「三ノ丸」「権現曲輪」「二ノ丸」「本丸」の順に曲輪名が記載され、現

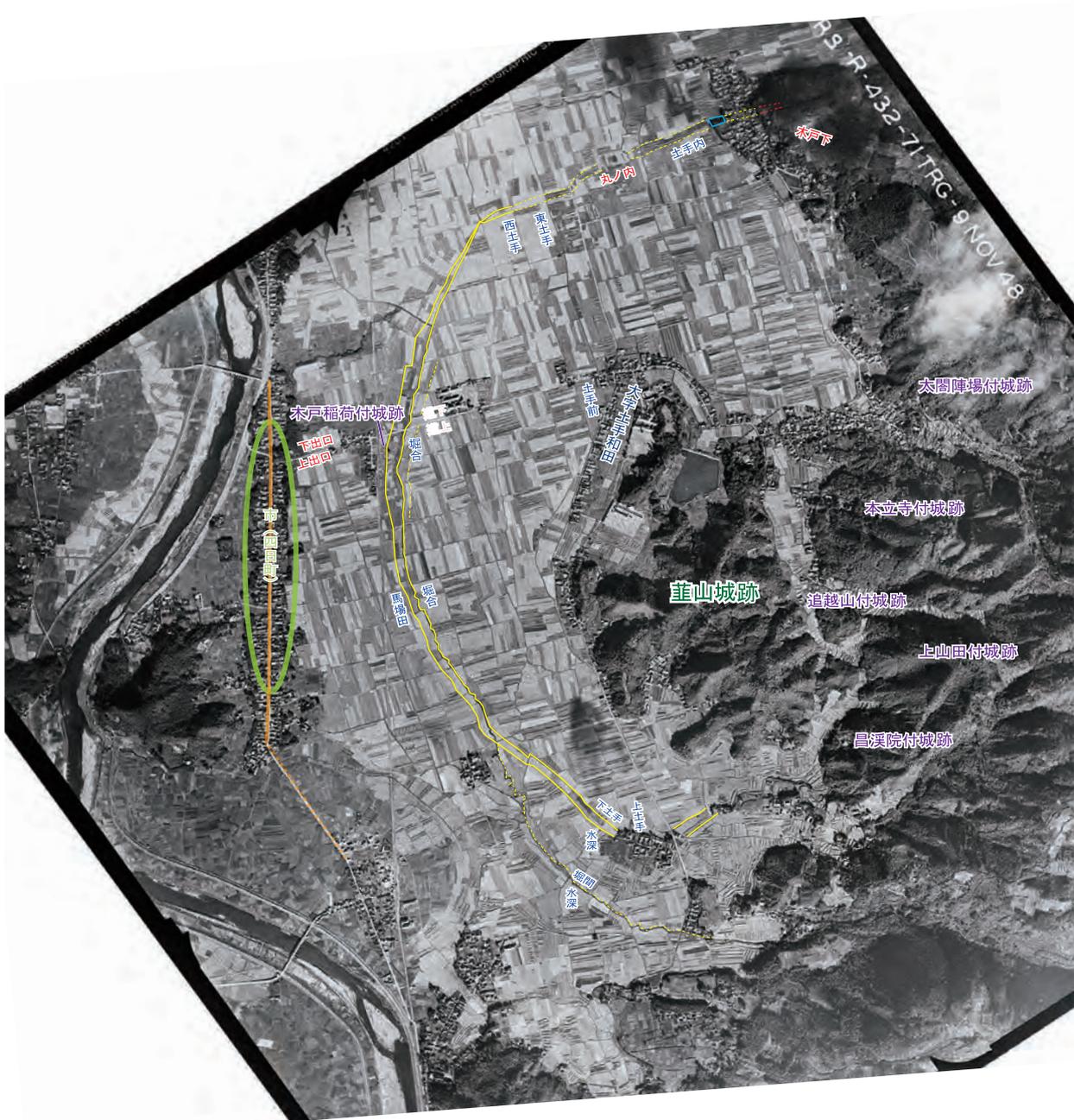


図8 古写真に見る葦山城を囲む「仕寄」の痕跡

在に至る曲輪呼称の元になっている。

昭和23年にアメリカ軍によって撮影された航空写真には、西側に葦山城を取り囲むような細長い水田の区画が見える(図8)。また、周辺には「堀合」・「○土手」・「水深」などの小字が残る。これは豊臣軍が築いた「仕寄」の痕跡と推定される。豊臣秀吉から鍋島直茂に送った書状には「…堀・柵を丈夫相付、鳥之かよひも無之被仰付候、…」(豊臣秀吉朱印状 天正18年)とあり、堀・柵で葦山城を囲み、東側の付城とともに葦山城包囲網を築いたことがわかる。

## 5. 葦山城の構造変遷

以上のように、様々な視点から葦山城を分析した結果、以下の4段階の変遷として捉えることができる。

第1段階：伊勢宗瑞在城時で「伊豆の拠点」段階。天ヶ岳山を意識して設計され、居住空間は芳池第1地点の屋敷地などを想定する。また、道路状遺構の配置から西側の下田街道方向を正面としたと考えられる。

第2段階：伊勢宗瑞没から河東一乱終結年までで、「北条領国繋ぎの城」として位置づけられる。この段階の明確な遺構がなく、考古学的には不明である。本城の曲輪の成立が問題となるが、本段階もしくは次の第3段階前半には構築されたと考えたい。

第3段階：永禄・天正期。葦山城の最盛期で、「領国の境目の城」となり、構造に大きな変化が認められる。前半は永禄～天正前半で、本城を囲む堀1が設置され、天ヶ岳の尾根に土手和田遺構群や江川遺構群が築かれる。後半の天正期後半には、豊臣軍への防備のため、「大構」（堀2・6）が配置された。堀以外の遺構については考古学的には不明であるが、城内においても様々な構造変化があったと考えられる。

第4段階：北条氏滅亡後の内藤段階。本城西側山麓が中心で、その北側に大手を構える。「御座敷」・「大手」の小字名はこの段階のなごりであろう。天ヶ岳の山城部分はあまり使用していないと想定される。

## 6. 北条領国における葦山城の変化

5で述べたように、葦山城は「伊豆の拠点」→「領国の繋ぎの城」→「領国の境目の城」と変化してきた。この中で第3段階の「境目の城」段階において、周辺地域や城との位置づけにさらに変化が認められる。

永禄期から天正期前半、具体的には武田氏との攻防の段階において、駿河国東部や伊豆国に多くの城や砦が築かれたことが文献や縄張調査などからわかる。とくにこれらの城砦は葦山城西側の駿河湾海岸線と狩野川沿いに位置していることに注目したい。北条氏は武田氏との攻防において、境目に配置した城砦のネットワークを形成し、葦山城はその要として機能したと考えられる。

ところが、天正期後半、豊臣軍との攻防においては、前述の諸城砦群は姿を消す。天正18年3月、豊臣軍のせまる山中城を守る松田康長の書状には「箱根路ハ当城、片浦口者葦山、川村口ハ足柄之城、三ヶ所ニ極申候」とあり、小田原城の防衛については、箱根道は山中城、片浦口は葦山、河村口（足柄峠）は足柄城と、箱根山を越える街道それぞれに防衛線を敷いて対抗する方針とした。片浦口は小田原城から海岸を南下した、現在の根府川付近に想定できるので、葦山城から丹那方面を經由し熱海を経て小田原に至る道が整備されていたと考えられ、初戦から葦山城を大軍で囲んだ豊臣軍は、このルートの重要性を理解していたのであろう。

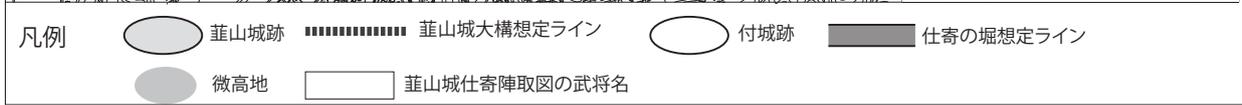
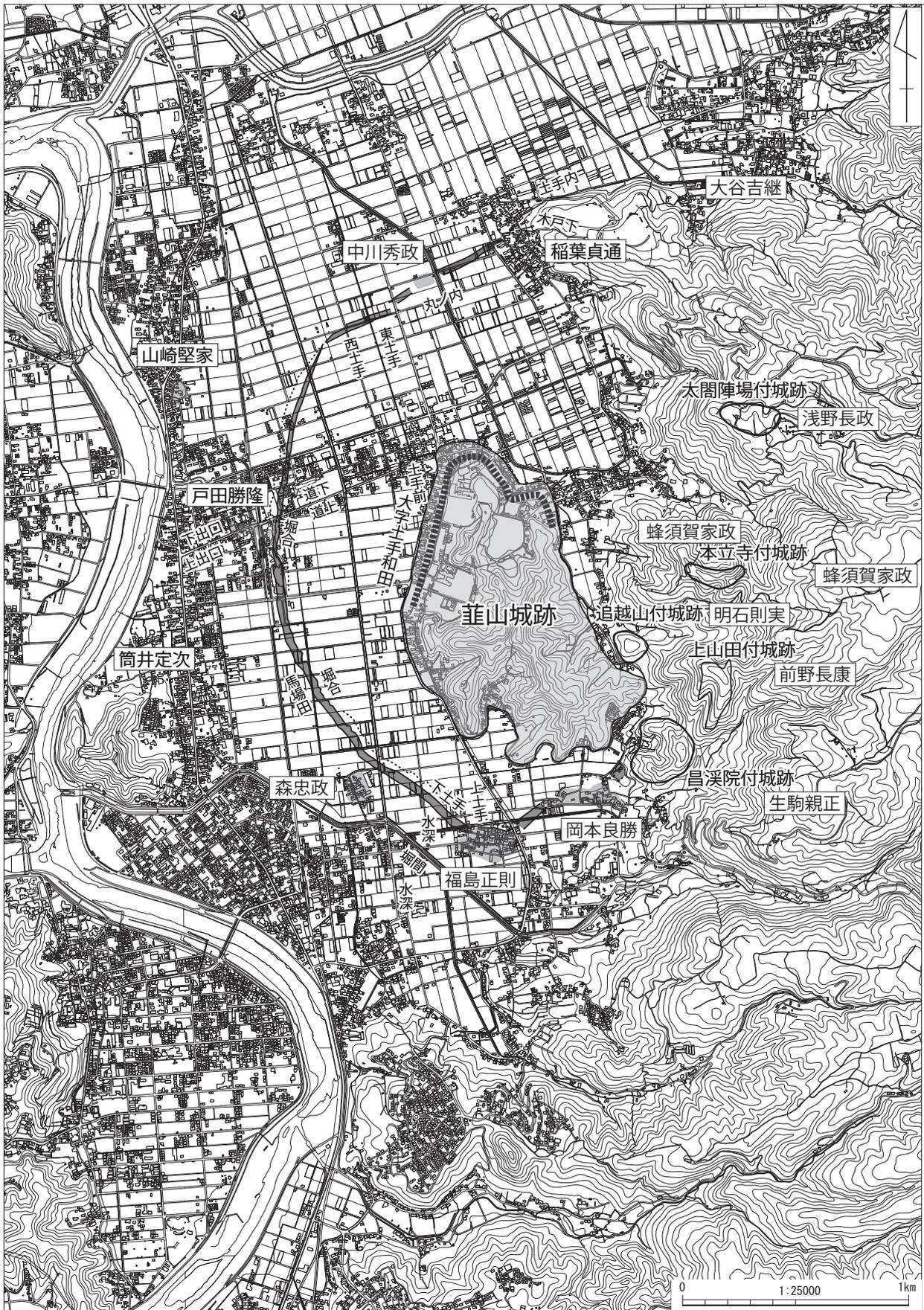


図9 天正18年葦山城包囲網想定図

## おわりに

これまでの調査により葦山城跡の特徴、価値は、『葦山城跡及び付城跡群総合調査報告書』では、以下のように総括された。

- ①伊勢宗瑞の領国形成の最初の中心政庁が置かれた場所である。
- ②天正 18 年、豊臣秀吉軍に対抗した北条領国東部の諸城郭のうち、重要な 3 つの城郭、山中城、足柄城、葦山城の一つである。
- ③秀吉軍の包囲配備が、遺跡・文献から復元して捉えられる。
- ④大名領国の変化が、町場を含めた城の構造変化の中に体现されている。

伊豆の戦国時代の「はじまりと終わりを語る城」葦山城は、以上のような歴史的価値が評価され、令和 7 年 6 月 20 日に開催された文化庁文化審議会にて国史跡指定の答申がなされた。

現状では、本城や天ヶ岳の遺構群の発掘調査データの不足や、付城群や仕寄の堀の実態解明など、課題は多く残っている。今後の整備に向けて、発掘調査をはじめとするさらなる調査が続けられ、具体的な遺構の姿や構造の変化を解明が求められる。

## 【参考・引用文献】

池谷初恵 2010 『鎌倉幕府草創の地－伊豆葦山の中世遺跡群』（シリーズ遺跡を学ぶ）新泉社

伊豆の国市教育委員会 2023 『葦山城跡発掘調査報告書Ⅰ』

伊豆の国市教育委員会 2024 『葦山城跡及び付城跡群総合調査報告書』

伊豆の国市教育委員会 2025 『葦山城跡発掘調査報告書Ⅱ』

\*伊豆の国市教育委員会刊行の各報告書は全国文化財総覧で閲覧・ダウンロードできます

<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja>

# 日本最大の海賊 村上海賊

今治市文化振興課学芸員

田中 謙

## はじめに

村上海賊とは？

南北朝時代に史料上に姿を現す。瀬戸内海の中央部、芸予諸島の能島・来島・因島を本拠とする三つの村上氏の総称。能島村上氏と来島村上氏は、「日本最大の海賊」「日本中で最高の海賊」として座を競い合う二人」と称された海の勢力（『フロイス日本史』）。

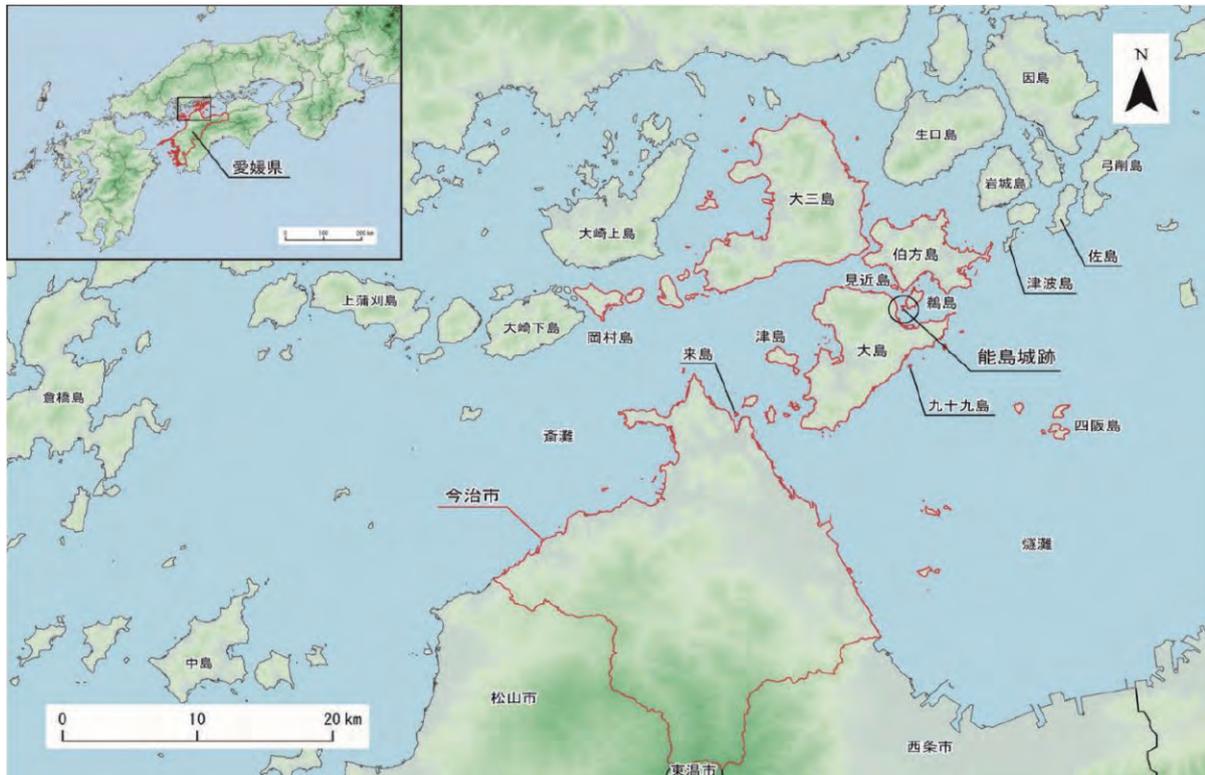


図1 瀬戸内海、芸予諸島、愛媛県、今治市の位置

## 1. 村上海賊か、村上水軍か

### (1) 鎌倉時代以前の海賊

「御成敗式目」…「海賊」は取り締まりの対象。重罪、海上交通を脅かす存在。

瀬戸内での「入海」・「海賊」は不慮の災難。年貢の輸送者は免責（『東寺百合文書』）

### (2) 村上海賊が台頭した時代

中世文書には「海賊能嶋方」「備後海賊村上」「四国海賊」「伊与周防海賊」

「野島関立」（※関は海賊のこと（『日葡辞書』））などと表記

### (3) 「海賊」と「水軍」の用語の変遷

『古事類苑』「水軍上」（明治時代に編纂された辞書）※国立国会図書館デジタルアーカイブ

「水軍は古くふないくさといい、後に海軍とも称す。兵船に乗じて戦闘する軍を言うなり」

水軍＝舟師（ふないくさ）

水軍の例 甲斐の武田、相模の北条、安房の里見、安芸の毛利、伊予の河野、志摩の九鬼

『海軍兵学校教育参考館図録』（昭和9年）

「村上水軍は往々海賊流と呼ばるることあり。ただしここにいう海賊は必ずしも「パイレート」の意にあらず舟師に対する称呼と考うべきものなり」

#### 〈用語の変遷〉

① 史料用語 海賊 など ・当時の史料では「海賊」を「水軍」とは表現しない

↓

② 職としての「水軍」 ・江戸時代の兵法書に「水軍」と記され始める  
・明治の海軍が村上氏ら海賊を「水軍」とみなす  
・水軍とは政府や大名の海上軍事勢力。のちに「海軍」

↓

③ 村上水軍 ・昭和初期に顕在化（海軍兵学校）  
・戦中は海軍関係者、戦後は研究者らによって広められた

↓

④ 村上海賊 ・村上家の直系子孫は古くから使用。江戸時代前期に用例あり  
・史料上の用語に近い

## 2. 海賊の生業

### (1) 一般的な海賊イメージ

海賊＝略奪者、冒険者、悪者 → Pirates（パイレーツ）のイメージ

「賊」＝ぬすびと

### (2) 海賊イメージの転換

- ・1349年 警固の対価として「野嶋酒肴料 三貫文」（『東寺百合文書』）←村上氏の初見資料
- ・1389年 足利義満の厳島神社への参拝や西国の遊覧の際、海賊が兵船をそろえて船を警固（『鹿苑院西国下向記』）
- ・「関方」（関＝海賊※（『日葡辞書』より））…唐船警固を命じられる海上勢力
- ・1434年 「備後海賊村上」「伊与周防海賊」（『満濟准后日記』）

明（中国）から帰る船の警固を依頼

### (3) 通行料の徴収と海の安全保障

「海賊の危険とか嵐などは、これら日本の島々の間を航海するものには、きわめてありふれた通常の出来事」（『フロイス日本史』）1581年、宣教師ルイス＝フロイスが豊後に接近した際の記録

○どのように海賊の危険を回避するか

#### ・礼銭

「一、四月朔未出船、未刻関之大将ウカ島賊船十五艘アリ、互以端舟問答及昏鴉、逢夜雨臥蓮窓、及暁天、出過分之礼銭、無事、(略)」(『梅森守龍周防下向日記』)

海賊たちの生活の場である「ナワバリ」を通らせてもらうための「礼」の銭。海賊の生業であり、正当な権利。 ⇨ この意識が薄れたとき、略奪という感覚になる

#### ・上乗り（うわのり）

1577年 「フロイスらが兵庫から豊後へ向かう際、塩飽の港で案内を託したる「海賊の頭の僕」一人の到着するまで八日間待つ」（『イエズス会士日本通信』下）

1581年 「能島村上氏が乗り込む⇒上乗りがいると「丁寧なる挨拶」をして撤退」（『イエズス会日本年報』上）

#### ・過所船旗（かしよせんき）

「このあたりが多数の島嶼であるために船で絶えず通行せねばならなかったし、つねに海賊の手に陥る危険に曝されていたので（略）その人物から通行保証状をもらえないものか交渉したいと考えた（略）能島殿に対して、我らがその交付する署名によって自由に通行できるよう、好意ある寛大な処置を求めた。（略）彼は、怪しい船に出会った時に見せるがよいとて、自分の紋章のはいった絹の旗と署名を渡した。」（『フロイス日本史』）

天正九年三月廿八 武吉(花押)



紀州雜賀之内向井弾右衛門尉

図2 【重要文化財】村上武吉 過所船旗（個人蔵）

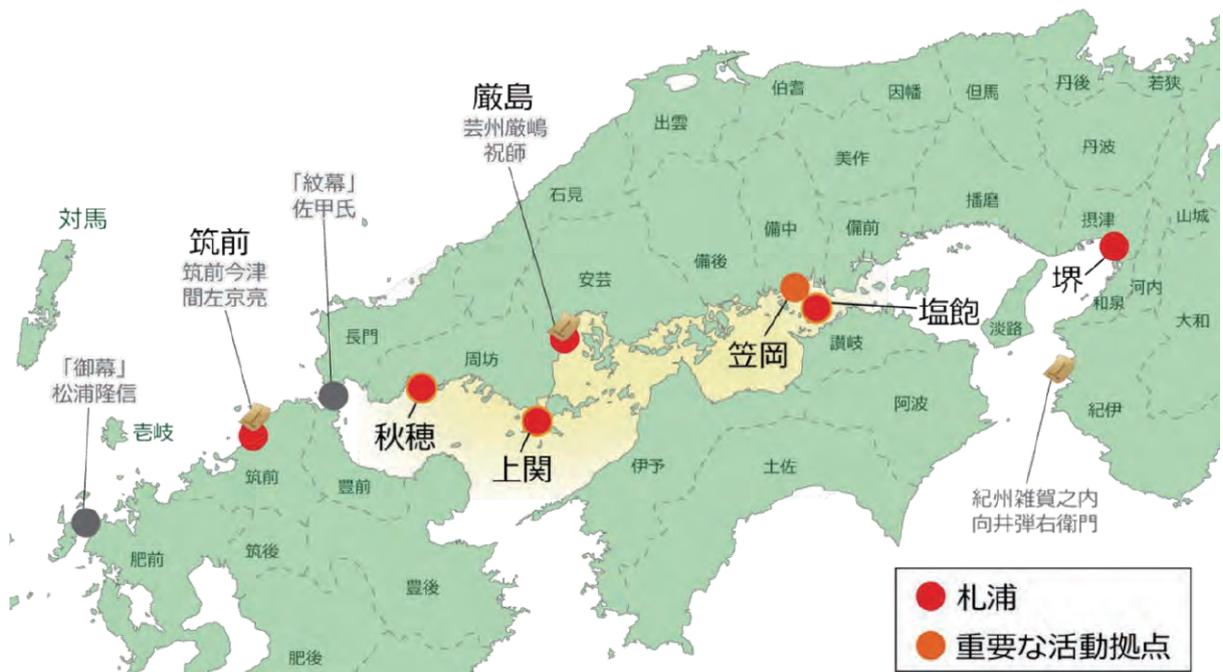


図3 能島村上氏の活動拠点と「札浦」（通行料を徴収する権限を持っている港）

(4) さまざまな顔をもつ「海賊」

- ・水軍、水先案内人、警固（ボディーガード）、漁師、商人 など
- ・「水軍」は軍事的な側面を示す用語に過ぎず、村上海賊の本質を表すことができない

3. 村上海賊の城

(1) 海賊の世界へ—村上氏の台頭と築城ラッシュ—

- ・村上海賊の最古の城は「能島城」（国指定史跡）
- ・出土遺物の年代から、築城は14世紀中頃以降 = 文献への登場（1349年）と合致
- ・その後、15世紀に因島村上氏、来島村上氏の史料上に登場  
= 15世紀の海賊の台頭、築城ラッシュ、海辺の集落の発達が連動する

表1 村上海賊の城の消長

	14世紀	15世紀	16世紀
甘崎城			■
能島城		■	
見近島		■	
来島城			■
武志城			

(2) 瀬戸内海（芸予諸島）の中世城郭の特徴

海峡・瀬戸・灘（航路）を望む場所にあり、

① 小島全体を城郭化する

= 島城（特異な形態、芸予諸島に密集、接岸施設（岩礁ピットなど）がある）



図4 来島城跡



図5 岩礁ピット（甘崎城跡）

② 鼻や岬、湾に突き出した丘陵の頂部に築かれる

= 鼻城、岬城

A：接岸施設（岩礁ピットなど）の遺構を持つもの

B：接岸施設の遺構が確認されないもの



図6 姫内城跡

③ 直接海と接しないが、海を望む山の上や丘陵上

= 海を意識した「山城」

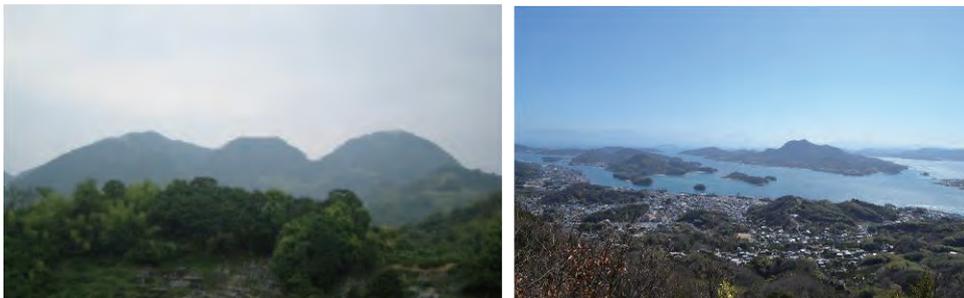


図7 青陰城跡

- ・いわゆる「海城」とされるのは①・② → 研究者によって定義はバラバラ
- ・芸予諸島では①の対岸には「水場」などの地名＝陸地部と前線の連動  
⇒海賊の本拠のあり方

### (3) 能島城跡（国指定史跡）の発掘調査

「副管区長師は室を出発して旅を続け、やがて我ら一行は、ある島に到着した。その島には日本最大の海賊が住んでおり、そこに大きい城を構え、多数の部下や地所や船舶を有し、それらの船は絶えず獲物を襲っていた。この海賊は能島殿といい、強大な勢力を有していた」（『フロイス日本史』）



図8 能島城跡全景と郭（曲輪）配置

#### 〈能島城の縄張り〉

- ・ 郭（＝曲輪）・・・郭Ⅰ～Ⅲ
  - 南と東に出曲輪（郭Ⅳ・Ⅴ）
  - 南部平坦地の造成、斜面の小平坦面
  - 鯛崎島（鯛崎出丸）（郭Ⅵ）
  - …ナワバリ（支配海域）の東端を視認可能
- 切岸○ 土塁× 堀切・縦堀・横堀× 柵△
- 虎口（出入口）・・・単純
- ＝縄張は総じて簡素であり、海に対して開放的
- 14世紀～16世紀の長い存続期間の中で、防御性を高める整備を行った痕跡は見られない

⇨戦国山城との違い

- ・ 「海面」「潮流」による自然の防備性

→ 10ノット（時速約18km）の潮流は常時ではない。周期的に小潮、潮止まりがあり不安定

⇒海面（船）を利用した海賊の防御戦略があったはず

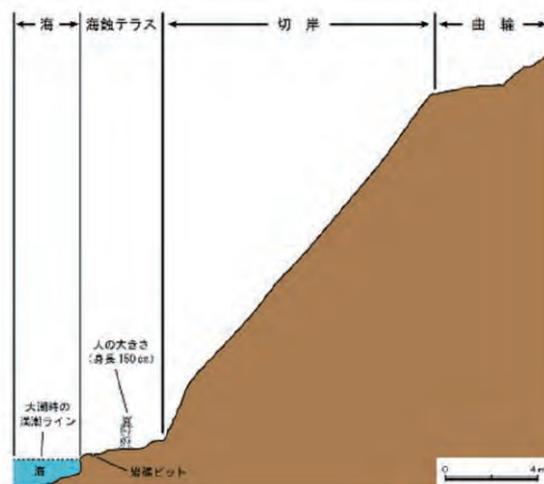


図9 能島城防御構造模式図

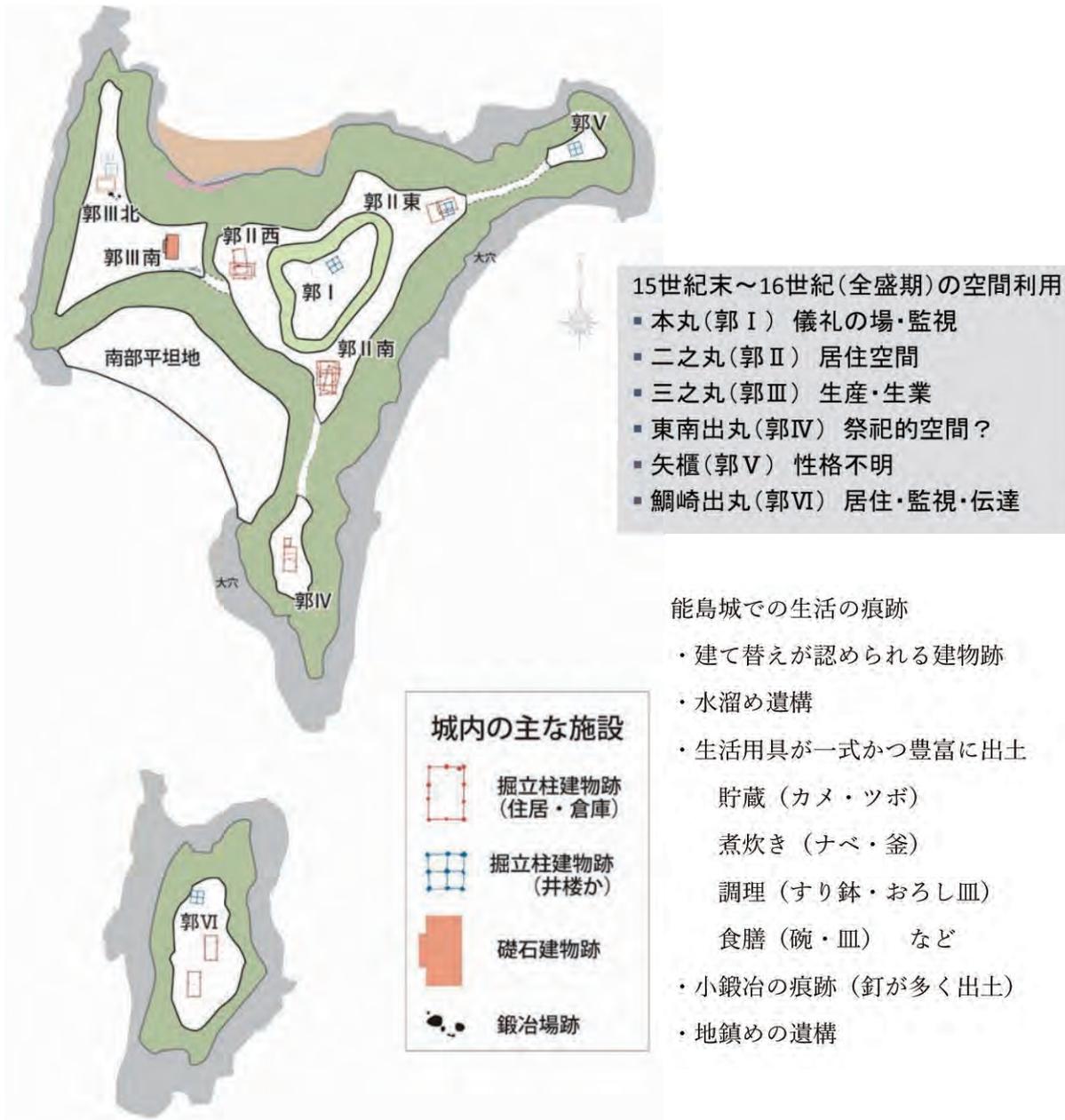


図 10 能島城の空間利用

表 2 発掘調査からみた能島城の変遷

年代	特徴	
14世紀中頃から後半	「能島」の利用開始。	I期
15世紀前半頃	南部平坦地の埋め立て開始。この頃までに築城開始。	
15世紀中頃から後半	遺物量の増加。利用の活発化。	II期
15世紀末から 16世紀前半頃	南部平坦地・本丸・船だまり斜面部などで、盛土による城の改修＝平坦面の拡大。出土品の質・量の豊富さからみると全盛期。	III期
16世紀中頃	南部平坦地の埋め立て完了＝能島城の最終形態。海外産の陶磁器などの搬入量が減少に転じる。	IV期
16世紀中頃から後半	出土品の量は減少していくが、16世紀末頃まで存続。	

#### (4) 能島城跡の特徴と普遍的な役割

「瀬戸内海の「海賊」、村上氏などが警固料を徴収したことが知られているが、「海城」はその実現のためになくなくてはならない施設であった。もしも警固料を出さずにその前面を通過する船があれば、城はその機能を全面的に発揮し、その船を拿捕するが、警固料を置いていくなれば、水軍は責任をもって航行の安全を保障したのであった。」〔網野 1992〕

村上海賊の城の機能とは？

- ・切岸と天然の崖以外の明確な防御施設はなし → 眺望の利く、開放的な縄張り
- ・岩礁ピット・海蝕テラス・海岸埋め立て → いつでも船が発着できるように整備された海岸
- ・豊富な生活用具と何度も建替えられた建物 → 海を熟知し、操船技術に長けた海賊衆の常駐

村上海賊の生業は、ナワバリ（支配海域）を通る船から通行料（礼銭・関役・津公事など）を徴収すること。存続期間が長く居住性の認められる城は、戦時の備えとともに、通行料徴収の根拠となる「ナワバリ」の象徴であり、多様な海上活動の拠点として長く機能した。

#### 4. 東国と西国の「海賊」

天正十八（一五九〇）年の秀吉による小田原城攻めでは、九鬼嘉隆や来島村上氏らが、秀吉の「船手」（水軍）として参戦。この「船手」のことを北条氏政は「西国海賊」と呼んだ。海賊＝水軍と捉える東国の認識がよく示されている。

東国の海賊＝海のサムライ!? 論争は続く…

「ある人が、「いくさ舟の侍衆」を海賊と言ったので、そこに侍がこの言葉を聞きとがめて、「おかしより山賊海賊というのは、山で盗みをなし、舟にて盗みをするからこう名付けたのである。文字の読み方もそうになっている。侍たるものが盗みをするところがあるか。それを海賊などというのは言語道断のけしからぬことである。そのようなことを言うのは物をも知らぬ木石である」と怒った。それを聞いて先ほどの者は（「中略）それでは、舟乗りの侍を何と呼ぶのか教えてください」といったので、この侍は返答につまんで無言になった。（以下略）」

『北条五代記』九巻 ※山内譲著『海賊の日本史』より引用

西国の海賊…「賊」的ニュアンス（山内譲氏）が色濃い（九州＞瀬戸内）＋流通への関与  
東国の海賊…「賊」的ニュアンスがほほみられない。海賊＝海上軍事勢力（水軍）

「海賊の儀」「海賊の奉公」←船の護衛を行う職務

→城の特徴と海の勢力の性格がどう連動するのか。比較研究を展開中。

#### 【主な参考文献】

網野善彦 1992 「太平洋の海上交通と紀伊半島」『海と列島文化』8 小学館

山内譲 2015 『瀬戸内の海賊 村上武吉の戦い』〔増補改訂版〕新潮社選書

山内譲 2018 『海賊の日本史』講談社現代新書

田中謙 2025 「海賊の城 能島城－中世「海城」の実像－」柴田圭子・川岡勉編『瀬戸内の中世Ⅰ』

高志書院



国指定史跡長浜城跡開園 10 周年記念講演会

駿河湾の海の城と海賊 - 葦山外張先之城二候 - 資料集

編 集 沼津市教育委員会

発行年月日 令和 7 年 8 月 30 日